

文部科学省補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

2020年度 連携型共同研究 成果報告書

研究課題名	美術鑑賞教材『アート と ともだち』を用いた教育の実践と検証
研究代表者	青木 宏子（大阪教育大学 表現活動教育系 美術・書道教育部門 特任准教授）
共同研究者	渡邊 美香（大阪教育大学 表現活動教育系 美術・書道教育部門 准教授） 高橋 暁生（積水ハウス(株) ESG 経営推進本部 美術館事業室・絹谷幸二 天空美術館 研究員）

研究成果

本研究は、昨年度の研究において開発した美術館鑑賞教材『アート と ともだち』が、実際に教育現場において広く教師の実態に応じ、活用していけるかどうかについて、教育現場での実践を通して分析し検証したものである。鑑賞活動は、子どもたちの想像力を高め、感性を豊かに育むと同時に、コミュニケーション力（作品鑑賞を通じた思考力や感受性、人に伝える行為を通じた言語能力など）の向上も期待できるものである。しかしながら、調査の結果、美術館での鑑賞学習前に学内で行う事前学習の充実が重要であることを再認識する一方、ファシリテーションの方法や、事前に見せる作品の選択など、鑑賞教育の経験が浅い教員にとっては「その有効性を了解していても取り組むまでのハードルが高い」という課題が見られた。このような状況に鑑み、昨年度、積水ハウス株式会社が芸術文化発信の拠点として開設した「絹谷幸二 天空美術館」と共同で、現場の教員が美術館訪問の機会を活用し、事前学習に取り組むことができるような教材『アート と ともだち』を開発した。美術の鑑賞教育における「事前授業・美術館での鑑賞・事後授業・発展学習」などのノウハウを提案したファイル冊子であり、また、美術館での鑑賞学習の方法に対して不安や苦手意識のある教師にも用途に応じて活用してもらうことができるよう、本学美術教育のHPにも本教材をUPしている。

[https://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~bi\\_jutsu/menu3\\_3.html](https://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~bi_jutsu/menu3_3.html)

本研究では、『アート と ともだち』を用いて、大阪市立小学校をはじめとする実際の教育現場での鑑賞教育において、積水ハウス株式会社 ESG 経営推進本部 美術館事業室「絹谷幸二 天空美術館」と引き続き連携して、美術館訪問での鑑賞活動を通し、現場の教員が実際に活用しやすい教材であるか、児童の鑑賞活動の目的の達成を支援する教材であるかを、活動の記録やインタビュー調査から分析し、検証することを目的とした。また、コロナ禍の状況を受けて、オンラインで美術鑑賞の事前事後指導を行うアプリケーションも検討した。

<8月5日>『アート と ともだち』の研究内容に賛同してくださった企業「日本たばこ産業株式会社 JT 大阪支社」の関西リレーション推進部担当者が「絹谷幸二・天空美術館」にて実施した研究ミーティングに同席。同社が和歌山県に所有する「JTの森」の桧の間伐材を用いて、鑑賞を助けるツールである『鑑賞ルーペ』を、中辺路町森林組合での生産を提案。8月に開催予定のアートラボでの活用に合わせて生産体制に入った。

<8月23日、24日>『ワークシート』とJTの森の桧の間伐材で制作された『鑑賞ルーペ』を用いて、絹谷幸二 天空美術館にて『アートラボ』を開催。大阪市淀川区内の小学4年生から中学3年生までの子どもたち31名が参加。「作品の前でキュレーターが『どんな色が使われているかな？ルーペを使って探してみよう！』と促すと、子どもたちは画面に近づいてルーペをかざし、近づいてよく見ると沢山の色が使われていることにとっても驚いていました。作品の色彩の豊富さに気が付いた子どもたちは、その後も鑑賞する作品毎にルーペを使って色の発見を楽しんでいました。」と検証報告が上がっている。子どもたちのアンケートでは「絵画・ART作品が好きになりましたか？」の問いに対し、D.とても好きになった…10名、C.好きになった…7名、B.少し好きになった…9名、A.変わらない・変化なし…4名という回答があり、31名中27名が本教材を活用したアートラボに参加したことによって、これまでよりも美術鑑賞の面白さに興味を持ったという結果が得られた。また、「A.変わらない・変化なし」と回答した子どもたちも「アート作品を鑑賞した今日の感想を教えてください」の問いには、「スタッフの声かけや、絵画作品の深さなどがしれた」、「ふしぎ」、「知らない色とかがたくさんあって、楽しめた。」、「見たこともない物を見て、すごいと思った。」と回答しており、B・C・Dと回答した子どもたちと同様に新しい体験に心を揺り動かされた様子が窺えた。<9月14日>京都国立近代

美術館の教育普及担当学芸員に本教材を紹介。ワークシートや鑑賞ルーペについての意見を聴取。「ぜひ使ってみてみたい」とのことで、コロナ後に京都での使用の広がりを検討。＜9月23日＞オンラインに対応する教材「SDGsに関連する『このルーペ、どのように作られているのだろう？』動画」を作成するため、和歌山県のJTの森・中辺路町森林組合・工房にて撮影・取材。12月に完成。作成した動画は、これである。



### 『このルーペ、どのように作られているのだろう？』

＜11月17日＞ 絹谷幸二 天空美術館での第2回目のアトラボの実施を12月13日、20日、26日で計画。しかしながら、12月初旬に感染拡大のためアトラボ計画は中止。感染が終息し、参加者の安全面が確保できるようになれば、再度計画する予定。＜11月10日 及び 12月14日＞和歌山大学附属小学校の校長・教員に本教材を紹介。本教材を用いたの鑑賞教育の実施検討や教材に対する教師のインタビュー調査を行った。「隣りに和歌山県立近代美術館があるので、コロナの状況を見ながら実施したい」、「鑑賞教育に対する教材として是非使ってみてみたい」、「図画工作以外の教科でも鑑賞ルーペを活用してみたい」等の意見が得られた。今後、感染が終息した折に、実践を計画する予定。＜11月25日＞和泉市久保惣記念美術館に本教材を紹介。『鑑賞ルーペ』について書道家の永山飛潤氏からは「鑑賞したい作品を実寸大のままで見ることができる」、教育普及担当の学芸員からは「『鑑賞ルーペ』を使うと、鑑賞者が見ているところがわかる」「館でも事後指導は絵を描くなどの活動をしているが、事前指導はやっていないので是非やりたい」との意見を得た。また、同館が和泉市や市の教育委員会と協働で開催している小学4～6年の親子対象の『和泉市 ART GUSH』のイベントにおいて『鑑賞ルーペ』を使用した鑑賞活動を実施することを計画。本教材を活用した鑑賞活動の広がりや地域とのつながりが期待される。新型コロナの感染状況を鑑み、2021年5月15日に実施予定である。＜12月3日＞絹谷幸二氏のご息女である絹谷香菜子氏による油絵具とテンペラフレスコ絵の具などの違いについての特別講義を、大阪教育大学にてオンライン授業の形式で、12月のアトラボの実施日に合わせて絹谷幸二・天空美術館を訪問するための事前授業として実施。しかしながら、感染拡大によるアトラボ計画の中止に伴い、大阪教育大学の学生の美術館訪問も中止。訪問できないことは残念であったが、材料に関する興味・関心を持って作品を鑑賞する視点を持つという鑑賞教育の事前授業の意義・成果が得られた。＜12月23日＞大阪教育大学附属平野小学校の教科「未来そうぞう科」の小学5・6年生向け大阪教育大学特別授業で『鑑賞ルーペ』を用いた特別授業において『オンラインに対応した教材』を紹介した。それを受けて、『鑑賞ルーペ』220本を附属平野陽学校に提供。その後、小学2年生の学年で、覗いて見ることに興味を持たせる「魔法」の授業で『鑑賞ルーペ』が活用された。この実践事例については、2021年度にHPを作成し、掲載予定である。＜3月30日＞大阪市内の小学校図工部教員に紹介を行ったところ、他大学の図画工作の授業で指導に活用することを検討していただいた。＜3月26日＞この日に実施された絹谷幸二 天空美術館との研究ミーティングでは、大阪教育大学の令和3年度公開講座での『アート と ともだち』の活用を検討。『美術館を楽しむ ～絹谷幸二 天空美術館編』は令和3年5月29日に実施予定。

以上のように、オンライン教材を作成し、SDGsの観点から広げていくことはできたが、新型コロナの感染拡大のコロナ禍においては学校教育現場に取り入れて実証ができない状況であったが、今回の意見聴取においてもよく聴かれた「ぜひ取り入れたい」という希望を受け、ぜひ今後は現場での実践を取り入れて事例を収集し、教材の改善を図っていききたい。また、今回の研究活動で鑑賞教材『アート と ともだち』を使用した活動や教材をできる限りで広めたことで、次につながる活動へと展開し、令和3年5月に和泉市久保惣記念美術館での『和泉市 ART GUSH』を予定である。「新型コロナが終息した折には、ぜひ使ってみてみたい」との教育関係者との意見交換をもって、教材の可能性を広げることができたと考える。また、今回の検証では、『鑑賞ルーペ』に関して「子どもがモノを良く見ようとするツールである」「子どもが見ているところが教師に明確になる」などが浮かび上がってきたため、オンラインを通してSDGsにつながる教材開発を行った。

